そばに置きたい

益子焼の急須 光る名人芸

栃木県・益子は関東を代表する窯場であり、一大観光地ですが、ひっそりと仕事をしている職人もいます。

益子焼の窯元である木村三郎さんは、自分を売り込もうとせず、注文を受けて黙々と仕事をする作り手です。手仕事にかかわる仕事をしていると、そういう人の中でも特に優れた技術を持つ人に出会うことがあるのですが、木村さんはまさにそういう人です。

一見、型にはめて作ったのではないかと思ってしまうのですが、自分でろくろを回しています。まるで機械で作ったように、寸分の狂いもないかのように作る「魔法の手」を持っています。

「袋物」もいとも簡単に作ってしまいます。陶磁器の世界では急須や土瓶などを袋物と呼び、上手に作れるかどうかで技量が分かります。

特に急須のふたは難しい。でも、木村さんにかかるとお手の物です。中指と人さし指で絞り上げれば、あっという間に完成しています。サイズも本体にピタリと合うのですから驚きました。日本一の作り手と言っても言い過ぎではないと思います。

木村さんは、益子焼の窯元が出資して経営する共販センターに来る注文の中でも、難しい注文を一手に引き受けています。益子焼を代表する、山水や山野草などが描かれた「山水土瓶」をろくろで成形しているのも木村さんです。

（手仕事フォーラム代表　久野恵一）

益子焼の急須（木村三郎さん作）　直径9.5㌢、高さ10.5㌢。税抜き3800円。問い合わせは久野さんが関わる「秋月」（電話0946・25・1270、火曜定休）。

外山亮一撮影